

0 研究の問い直し ―身体と健康を見つめ、運動との関わり方をつくる保健体育へ―

4 年目を迎えるにあたり、改めて考えているのは、保健体育科の授業をどのような時間にしていくのかということである。保健体育科では、運動技能を高めることや体力を向上させることはもちろん大切である。同時に、自分の身体の状態に気づくこと、健康について自分の生活と結び付けて考えること、仲間と関わりながら安全に運動することも大切な学びである。特に運動場面では、「できる／できない」「得意／苦手」「勝った／負けた」がはっきり表れやすい。その結果だけで授業が終わってしまうと、運動が得意な生徒にとってはよい時間になっても、苦手意識のある生徒にとっては、運動との距離をさらに広げてしまう可能性がある。だからこそ、保健体育科の授業を、単に運動を行う時間や知識を覚える時間にとどめず、生徒が自分の身体や健康を見つめ、運動との関わり方を自分なりにつくっていく時間になりたい。何が起きているのかを観察し、なぜそうなったのかを考え、次にどう関わるのかを選ぶ。その積み重ねを、保健体育科の学びの中心に置きたい。

1.4 年間の研究テーマと系譜 ―OODA から F+OODA、そして地域実践へ―

本校保健体育科では、これまで「様々な観察方法を用いた論理的思考力の育成と感覚の言語化」を軸に、OODA(観察・判断・決定・行動の流れで状況に対応する考え方)を活用した授業づくりを進めてきた。1 年目は、OODA の中でも、運動中の出来事を「観察する」ことを学習の入口とした。自分の動き、仲間の動き、チームの状況、相手との関係などを見取り、そこから課題を見つけ、次の行動へつなげることをねらいとした。2 年目は、地域実践の年であった。本校の研究テーマを受けて、公立中学校でダンス、ハンドボール、バドミントンなどの実践が行われた。それぞれの学校が、単元や生徒の実態に応じて研究を組み替えたことで、本校の研究が地域の中でどのように形を変えていくのかを見ることができた。3 年目となる昨年度は、教科研究会の年として、本校で公開授業と研究発表を行った。OODA に Foresight(先を見通すこと)を加えた F+OODA へと研究を発展させ、研究主題を「観察から洞察へ——思考の往還が生む“選ぶとる力”の育成」とした。授業では、F+OODA、If-Then(もし〇〇なら、△△するという短い行動方針)、TRIST(仲間と役割を分担し、見る・伝える・試すことを回す学習の形)、形成的評価(学習の途中で生徒の変化を見取り、次の学びにつなげる評価)を組み合わせ、観察した事実をもとに理由や条件を考え、次の行動を短い言葉で選び直す授業構造を提案した。今年度は 4 年目となる。昨年度、本校で示した研究を、再び地域実践へ開いていく年である。ただし、附属で行った授業をそのまま広げることが目的ではない。地域の学校や単元、生徒の実態の中で、この研究がどのように受け止められ、どのように組み替えられるのかを見ていきたい。

2.今年度の研究テーマ ―地域実践から見直す“選ぶとる力”を育てる授業づくり―

今年度は、昨年度の研究主題を引き継ぎながら、地域実践を通して、「観察から洞察へ」という学習の流れをもう一度見直す年としたい。研究主題案は、次のように考えている。

観察から洞察へ——地域実践から見直す“選ぶとる力”を育てる授業づくり—F+OODA を手がかりにした学習過程の再整理—

ここで重視したいのは、F+OODA や If-Then といった手立てをそのまま広げることではない。これらは、あくまで生徒の学びを支えるためのものである。今年度見ていきたいのは、学校や単元が変わっても共通して働く学習の流れである。生徒が何を見ているのか。見たことをどう意味づけているのか。そこから次の行動をどう選んでいるのか。試した後に、考えや行動がどう変わっているのか。こうした流れを、地域実践の中で確かめていきたい。

3.今年度の具体的な内容 ―観察・洞察・選択・実行・再構成の見取り―

今年度は、地域実践校と連携しながら、各校の授業の中で「観察→洞察→選択→実行→再構成」の流れがどのように表れるのかを見取っていく。観察では、生徒が自分の身体の状態、仲間の動き、相手との関係、場の状況、安全に関わる条件などを具体的にしているかを見る。洞察では、観察したことをもとに、なぜうまくいったのか、なぜうまくいかなかったのか、どのような条件が関係していたのかを考えているかを見る。選択では、考えたことをもとに、次にどう動くのか、どう関わるのか、何を調整するのかを短い言葉で表しているかを見たい。さらに、それを実際の運動場面や学習場面で試し、その結果をもとに考えや行動方針を言い換えたり、修正したりしているかを見取っていく。これらを、生徒の記述、発言、行動の変化、仲間との共有場面などから見ていく。地域実践を通して、附属の研究をただ広げるのではなく、地域の実践によって附属の研究をもう一度問い直す年にしたい。また、今年度の中心は運動領域になると考えているが、この流れは保健領域にもつながる。健康についての知識を、自分の生活と切り離されたものとして学ぶのではなく、自分の身体や生活の状態を見取り、原因や条件を考え、よりよい行動を選び直すという点では、保健体育科全体に通じる学習過程として考えることができる。

4.来年度に向けて ―観察・洞察・選択の先にある「創造」へ―

今年度は、地域実践を通して「観察・洞察・選択」の流れを見つめ直すことを中心とする。その上で、来年度に向けては、その先にある「創造」という視点も考えていきたい。ここでいう創造とは、既存の運動やルールをそのまま受け入れて行うのではなく、生徒が目的、制約、人数、空間、得点条件などを調整し、自分たちにとってよりよい運動へとつくり変えていくことである。運動量が高まるようにする。苦手な生徒も関われるようにする。安全にできるようにする。仲間との関わりが生まれるようにする。より楽しく、より運動として意味のある活動にする。今年度、本校で取り組み始めた体づくり運動の実践には、その芽があると感じている。生徒が制約やルールを自分たちで調整しながら、遊びを運動へ、運動を遊びへと変えていく姿が見られた。来年度に向けては、今年度の地域実践から見えてきた共通する学習の流れをもとに、生徒が運動を読み解き、選んでだけでなく、運動や健康との関わり方そのものをつくり変えていく学びへとつなげていきたい。